太宰府人物志

資料室だより㉗

◆土方久元と『回天実記』

土方久元は天保4（1833）年土佐国土佐郡秦泉寺村（現高知市）に土佐藩郷士土方久用の長男として生れました。通称は楠左衛門、雅号は秦山。25歳で東遊し、儒者大橋訥庵らに攘夷思想を学びます。その後、土佐勤王党の結成に参加するなど藩内の攘夷運動に奔走し、文久3（1863）年31歳で藩命により京に赴き、三条実美ら急進派公家や薩長の志士と親交を深めます。当時三条実美は27歳、土方に対する信頼は厚く、土方は同年8月14日に学習院出仕を命ぜられます。しかしその四日後、8月18日の政変により三条ら急進派公家は京から追われ、西国に下ることとなります。

土方は三条らに随行し、慶応元（1865）年から同3年12月までを五卿とともに太宰府で過ごします。政変から五卿が宥されて帰洛するまでの日々を土方は日記につづっていますが、これは『回天実記』と題して明治30（1897）年に出版されました。

さて『回天実記』によると、太宰府で土方は桜馬場にある執行坊に寄居し、延寿王院の五卿に仕えています。『実記』には、主に土方や五卿らの行動や、志士たちとの交流により得た情報などが記されていますが、太宰府ならではの体験も少々つづられています。その中で唯一この地方の習俗について触れられているのが「もぐら打ち」についてです。もぐら打ちとは1月14日の早朝、竹の先に藁を巻いて作った特製の棒を持ち、大人子供が唱え声をあげながら地面を強く叩いてまわる行事で、豊作を祈るものと言われています。『実記』中、慶応2年正月14日の項には「今朝は当所之風俗にて早暁より家々むくら打と申事有之、亦可笑の奇事なり。むくらとは土龍の俗唱なり」とあります。もぐら打ちについては、隣り村で叩く音が聞こえてきて飛び起きたという話も伝えられており、このもぐら打ちの「騒動」に土方も、すわ五卿の一大事、と飛び起きたのかもしれません。

三条らの復権後、土方は取り立てられて新政府に出仕します。東京府判事・鎮将府弁事を務めたのち太政官に出仕、内閣書記官長・元老院議官・宮中顧問官・農商務大臣と出世していきます。明治17年に子爵を授けられ、20年には伊藤博文の後任として宮内大臣に就任、28年には伯爵に叙せられ、31年まで明治天皇の側近くに仕えます。宮相在任中の明治21年、写真嫌いだった明治天皇の「御真影」作成に頭を悩ませた土方が、衝立の陰からこっそり印刷局雇イタリア人キョッソーネに細密な原画を描かせ、それを撮影した話は世によく知られるところです。

市史資料室　藤田理子

※36頁地図参照